

蕉窗
一
味集



筆重吳雪鞋香
林之花超然松栝唱
吟無何
茅屋題



味

多

帝

之時道人屬

禪

印

白氏

一

一味集序

余與風行老人一見如舊終日清談而余
多不知俳諧何語及之老人謂余曰
無絃琴吹之也聲者真也一施絃而
為音入耳也假也俳乃有雅之聲而氣
人之可然非俳乃無人得聞也真純於
物而能不純也真也俳諧之道之復於
夫方可地虛靈之物有感之發於之者

乃雅也智巧其言炫人售名趨於利
莫不入俗也是所謂歌者之亂雅樂
也而人遠難入俗不知俳諧是為雅也然
其不愛見蕉菴之書西國可哀乎
蕉菴嘗曰白之一路亦不傳吾風也
此語欲救世俗之弊久矣矣是眼著其
言也清出其門也因出之客來其為
百十回忌辰與其徒所作之白句俳

おうてらる 猿のまをる 未改中
 身深さかじと おななるな
 おりさきまらひかふあまらぬ
 へおまこよ ぬ夫とらけし
 おけるあまよ けすけけあ
 ろうらけけい 気さきす
 まらぬのあまよ なのまらぬ
 こしあまらぬ ぬくのあ

朴信
 柳淮
 敬中
 漁翁
 漁翁
 柳岐
 飛玉
 琴糸

けい同をけけい 小きみひらふら
 うきき 指もまらぬまのえ
 七いあまらぬまのあまらぬ
 おる内 初の花のあまらぬ
 けい けいあまらぬ けいあまらぬ
 あまらぬまらぬ けいあまらぬ
 あまらぬまらぬ けいあまらぬ
 あまらぬまらぬ けいあまらぬ

急毫
 柳花
 七紅
 茂松
 漁翁
 佳也
 善信
 祥亦

ちのむにきしめかの葉んひ
 予并
 ふうせむいふたてしおしん
 楊条
 せんかふおひなむらひの原
 三指
 よれもらうちもあまむの猿
 元吉
 海士の葉も娘十あひ体せらん
 千嵐
 ちれつ子くらくらきれそし
 松年
 せえふふげんそくひももぬ
 石吉
 葉よむらむかむもむんのも
 北路

ちのむにきしめかの葉んひ
 梅宇
 ちんつとれおむむむらうら
 葵正
 娘あふんていあむかひける
 六外
 ちふむらさくまむらうらうら
 小秀
 ちりきうなうすしねみねて
 明権
 隣の板おひくも山
 三子権
 おまお拾留しらけぬあむむ
 三子尾
 のとあかうらよあうら機柳
 梅家

し

あつちいせいざいしんせいのせいしん

せいしん

おやいせいせいのせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

せいせいせいせいせいせいせい

せいせい

し

あま

えの瀬、まをさばる千るあ
 ねしをさるさじぶりのけ
 おしおあふさししたあふ
 おりいささふこしん 寝さる
 せふんを岩けりきさるあふ
 白と西のこしあさふと

寿世
 百七
 ち徳
 けそ
 陶舟

白きけのあふさししたあふ
 ねしをさるさじぶりのけ
 おしおあふさししたあふ
 おりいささふこしん 寝さる
 せふんを岩けりきさるあふ
 白と西のこしあさふと

ろ吹
 丸例
 垂風
 風石
 喉符
 学文
 中録
 長巻

海のほとけのこゝろのあはれぬの情
 ちこらちこらちこらちこらちこら
 海をわたるのこゝろのあはれぬの情
 風一かたのこゝろのあはれぬの情
 舟の舟もこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情

梅
 祥
 二
 女
 鬼
 双
 丸
 斗

こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情
 こゝろのあはれぬのこゝろのあはれぬの情

梅
 祥
 二
 女
 鬼
 双
 丸
 斗

白糸
 双風
 山人
 子繁
 橘桑
 深堂
 寺向
 朱毛

白糸
 双風
 山人
 子繁
 橘桑
 深堂
 寺向
 朱毛

硝子と信く小魚古びたもの 一
花畑

とすらのむらさきをもちまね 二
赤いお

ひたのけしきふつとまふうすま 三
おん

チヨウとさうしよとやぶ人 四
夜白

^{三才}人かぬさゆけりなまをまふく 五
五揚

かきかきかきりかきりかき 六
巾金

かきかきかきりかきりかき 七
久世

かきかきかきりかきりかき 八
林縁

おかしなこゝろにさるぬ小宰相 九
茶漬

おかしなこゝろにさるぬ花 十
魚寸

おかしなこゝろにさるぬ魚 十一
魚友

おかしなこゝろにさるぬお 十二
双鏡

おかしなこゝろにさるぬお 十三
家成

おかしなこゝろにさるぬ川 十四
清月

おかしなこゝろにさるぬ人 十五
岩登

おかしなこゝろにさるぬ 十六
おし

再至ふかぬいさかおまへ
 いすぬねのまゝ 杖を
 子^{ミチ}をさし一層ふくくちり
 ぬの^ぬもまをたすまて
 ぬ代もまをくくくまをた
 草のくくくは申候の水
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく

巳子
 虎解
 知考
 未止
 少意
 未後
 未意
 未林

本比のいすかたふくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく
 ぬがくくくくくくく

四峰
 支雅
 氏答
 五白
 志意
 志意
 柳坡
 唐々

美人の姿をいかにいかに
 天のふりそよふに 雲 祥
 松林の中をいかにいかに
 さらさらと風をいかにいかに 松の枝
 さらさらと風をいかにいかに 長松
 小くきぬきぬきと風をいかにいかに 石の
 跡をいかにいかにいかにいかに 水
 猿のふりそよふに 石の枝 白
 自然

西の空をいかにいかにいかにいかに 西の
 風をいかにいかにいかにいかに 雄風
 雲をいかにいかにいかにいかに 雲
 松林をいかにいかにいかにいかに 松林
 猿をいかにいかにいかにいかに 猿
 石をいかにいかにいかにいかに 石
 水をいかにいかにいかにいかに 水
 自然

くらゝは海田の歌は後をいへ
 いつかふふとまゝに 赤松
 おとゝに後の甲乙後きを
 ふりて虎の毛くよまゝに
 しなまの情心あゝくまゝに
 こゝろよふか 雲ふ川 鶴
 吉和 美洲 徳子 花丸 令松 松阿

あふ川

くらゝは海田の歌は後をいへ
 いつかふふとまゝに 赤松
 おとゝに後の甲乙後きを
 ふりて虎の毛くよまゝに
 しなまの情心あゝくまゝに
 こゝろよふか 雲ふ川 鶴
 吉和 美洲 徳子 花丸 令松 松阿

きらりしはなをさへもさしくと
磯のうきをわきわたるのきかき
のうきをわきわたるのきかき
ふしうきをわきわたるのきかき
刷りてわきのりかきかき
きりきりしうきをわきわたる
かきかきのうきをわきわたる
かきかきのうきをわきわたる
かきかきのうきをわきわたる

あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる
あつてもかきかきのうきをわきわたる

〇七六

もらばいふはしつものたるかし
記名してまじふ記れみ借
そよみ借もまじ月しふ
ふしつものもふみお減る
見らばまじけしおまのふまの
花のやまにふゆおかる果
おまじつにまじつものも
しおまじつものもまじつもの

意 什 意 何 意 果 何 意

^{たま}西のふいふおまおつし
今まじつものもまじつもの
射つものもまじつものも
しつものもまじつものも
おまじつものもまじつもの
おまじつものもまじつもの
おまじつものもまじつもの
おまじつものもまじつもの

果 何 意 何 意 何 意 何

葉 孫 方 孫 所 孫 針 山 山
 葉のふみやうわおまこらに
 ちち中殿葉の中おんこむ
 成田お名の海こつらこ
 木こまこねくあらまお日のる
 さるふあらこむこむ孫針
 ち 翠戸のちおまおのちおま 針る中
 人おまけこむつら 葉 葉

針 葉 孫 方 葉 針
 針のちおまおのちおまこらに
 ちち中殿葉の中おんこむ
 成田お名の海こつらこ
 木こまこねくあらまお日のる
 さるふあらこむこむ孫針
 ち 翠戸のちおまおのちおま 針る中
 人おまけこむつら 葉 葉

好

あはれなるものぞかし

好

のあはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

あはれなるものぞかし

好

好

はなをを休むらむものぬく
はとめ早ねある所ははな
咲くゆへ梅のやうかたるは
ねふちの露のころはかた
まはなれ様の言やんきま
はなうりやうはなまのふ
彩色のそよほ引つるはな
はなうけしきまかろんき

守 景 阿 樵 竹 古 居 應

やめけの湯たはねく業もあ
はなうけのそよほ引つるは
なうけしきまかろんき
まはなれ様の言やんきま
はなうりやうはなまのふ
彩色のそよほ引つるはな
はなうけしきまかろんき
まはなれ様の言やんきま
はなうりやうはなまのふ
彩色のそよほ引つるはな
はなうけしきまかろんき

松 竹 在 坡 樵 阿 好

左様
 梅子
 向葉
 飯汁
 五
 色
 石
 之

見方
 惣
 右
 左
 右
 左
 右
 左
 右

おとよらぬのちよひに
おまのむねおくらとあらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ

おとよらぬのちよひに
おまのむねおくらとあらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ

おとよらぬのちよひに
おまのむねおくらとあらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ

おとよらぬのちよひに
おまのむねおくらとあらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ
とせしむらぬとせしむらぬ

人其ふも我ちかへよるけ
 二かゝるもかへゆく路
 三ちも丸結るも喜つる
 四さかへんかかるとけ
 五さかへんかかるとけ
 六あもあかへんかかるとけ
 七あかへんかかるとけ
 八あかへんかかるとけ
 九あかへんかかるとけ
 十あかへんかかるとけ

宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗

人其ふも我ちかへよるけ
 二かゝるもかへゆく路
 三ちも丸結るも喜つる
 四さかへんかかるとけ
 五さかへんかかるとけ
 六あもあかへんかかるとけ
 七あかへんかかるとけ
 八あかへんかかるとけ
 九あかへんかかるとけ
 十あかへんかかるとけ

宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗
 宗

梅子の葉を煮て汁をとり

酒に混ぜて飲む

主治

喉痛、口舌生瘡、

舌燥

胃弱、食欲不振、

消化不良

嘔吐、下痢、

腹痛

風邪、頭痛、

頭痛

梅子の葉を煮て汁をとり

煎汁

酒に混ぜて飲む

す

梅子の葉を煮て汁をとり

煎汁

酒に混ぜて飲む

煎汁

梅子の葉を煮て汁をとり

煎汁

酒に混ぜて飲む

煎汁

梅子の葉を煮て汁をとり

煎汁

酒に混ぜて飲む

煎汁

夕しけふさしに十らちぢりやう
まふくからし人かきわく
さつほきしほのまきし
世にけふさしに十らちぢりやう
しるふさしに十らちぢりやう
いふる車かきわくはまふかて
ぬいふさしに十らちぢりやう
さぢのさしに十らちぢりやう

ち 什 何 出 在 景 懸 ち

彩^{ニヤ}のさしに十らちぢりやう
人かきわくはまふかて
いつのまじりのまきわくはまふかて
みみはまきわくはまふかて
まきわくはまきわくはまふかて
さしに十らちぢりやう
さしに十らちぢりやう
さしに十らちぢりやう

懸 景 何 出 在 景 懸 ち

牙
 振をいものふをぬける けを風物
 一ふをいふてい 舞ふいせもの
 やつらふおも也きと 出神候
 合おちを舞人の力けいり
 十しし 描ききとふ づれも也来
 んかくのも 活とをいやく
 中ふふふふふふふ ぢふふふ
 舞う人あつふふふ 舞をいやく
 什 何 々 懸 軒 景 ち 出

こころをいふてい 舞ふいせもの
 一ふをいふてい 舞ふいせもの
 やつらふおも也きと 出神候
 合おちを舞人の力けいり
 十しし 描ききとふ づれも也来
 んかくのも 活とをいやく
 中ふふふふふふふ ぢふふふ
 舞う人あつふふふ 舞をいやく
 什 何 々 懸 軒 景 ち 出

舞

代極紅肉々 竹枝つれをき
 茶店めぐりむじりのちき入
 ちきうめつれて 飴もあひのあう
 ちきうめつれつる 信くけ合
 大口のひききつる 花のま
 をしくあひき 魂みきき
 茶 茶 茶 茶 茶

茶

可くてよれりくちきくちき茶
 くらつていふもききい
 牛定のちきふ茶茶を 撰か
 古代あひききききき 茶茶茶
 時々くちきも ねきかむきなら
 ねきをあひきハ ちき人まきあ
 向茶 茶茶 茶茶 茶茶 茶茶 茶茶

三十九

十ちちのの(5)のいりてみへえのいりて
 今ふ〜ゆ〜か〜さ〜う〜れ〜のいりし
 ちねをちね〜き〜し〜や〜い〜よ
 人〜の〜い〜る〜き〜し〜の〜いり
 後炮のいり〜き〜き〜も〜お〜き〜ら〜や
 是き〜し〜ち〜も〜ま〜し〜る〜日〜を
 引〜つ〜は〜れ〜を〜よ〜し〜に〜程〜の〜いり
 景 出 ち 什 悲 何

初〜う〜し〜し〜ゆ〜れ〜の〜いり
 和〜ふ〜和〜舟〜の〜いり
 ち〜ね〜を〜ち〜ね〜の〜いり
 拾〜枝〜の〜いり
 ち〜ね〜を〜ち〜ね〜の〜いり
 久〜目〜の〜いり
 初〜う〜し〜し〜ゆ〜れ〜の〜いり
 ち〜ね〜を〜ち〜ね〜の〜いり
 和〜ふ〜和〜舟〜の〜いり
 初〜う〜し〜し〜ゆ〜れ〜の〜いり
 景 出 ち 什 悲 何

為業の後の世報を人々が
 する人の世におく世母を
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世

宗 應 五 牛 何 懸 什

世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世
 世の世の世の世の世の世

宗 何 五 什 何 宗

宗 何

五十一

一

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

何

五十二

うらなひつゝあつていふふてあつて
後子の御行もくもきり
何となく四十八歳をいふ
一かたのきいめさくはし
一かたのきいめさくはし
世にふの人をほもぢ
月とあつていふふてあつて
うらなひつゝあつていふふて

うらなひつゝあつていふふてあつて
後子の御行もくもきり
何となく四十八歳をいふ
一かたのきいめさくはし
一かたのきいめさくはし
世にふの人をほもぢ
月とあつていふふてあつて
うらなひつゝあつていふふて

りいしよまゝ十枚のふりまをすね
 我東にるのふりまをすね
 けり糸もあつこつとねむねむ
 せりりいしよまゝのふりま
 けりまをすねのふりまをすね
 ひりまをすねのふりまをすね
 るのしよまゝのふりまをすね
 おんまをすねのふりまをすね
 糸 什 糸 ち 何 ね

すしよまゝのふりまをすね
 糸のふりまをすねのふりま
 ねのふりまをすねのふりま
 るのふりまをすねのふりま
 二枚のふりまをすねのふりま
 せりまをすねのふりまをすね
 糸もあつこつとねむねむ
 るのしよまゝのふりまをすね
 おんまをすねのふりまをすね
 糸 什 糸 ち 何 ね

必しうらふふいふを離すとくも
ふやそくをさめくまか
ましきハ必の信候とまをく
あつちてくくわ山
あつちてくくわ山
ましきハ必の信候とまをく
あつちてくくわ山
あつちてくくわ山
あつちてくくわ山
あつちてくくわ山

小月てなれハ信りぬ 弘治
まいぬまいぬ 西をかく
解も ぬくまぬ 不
いさそをぬ 又川とま
あつちのまの信りて市ハ押
あつちの信りて市ハ押
あつちの信りて市ハ押
あつちの信りて市ハ押
あつちの信りて市ハ押
あつちの信りて市ハ押

...

六比花... 係る 五

ひかり... 係 係

係とお... 佳 佳

五比花... 千 千

場... 係 係

... 升 升

... 也 也

... 京 京

千... 升
 ... 係
 ... 京
 ... 佳
 ... 風
 ... 升

...

茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ

茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ
 茶の葉は花とちがふをいふ

ひしひしとあつたつたのこゝろ
おたまらぬおぼろげのまや業
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる

係 ち 茶 花 茶 ち 係

おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる
おぼろげなまのぼろりーる

係 ち 茶 花 茶 ち 係

茶
かゝる茶は Summer の茶に
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味

茶 花 茶 茶 茶 茶 茶 茶

茶
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味
茶の味は 茶の味

茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶 茶

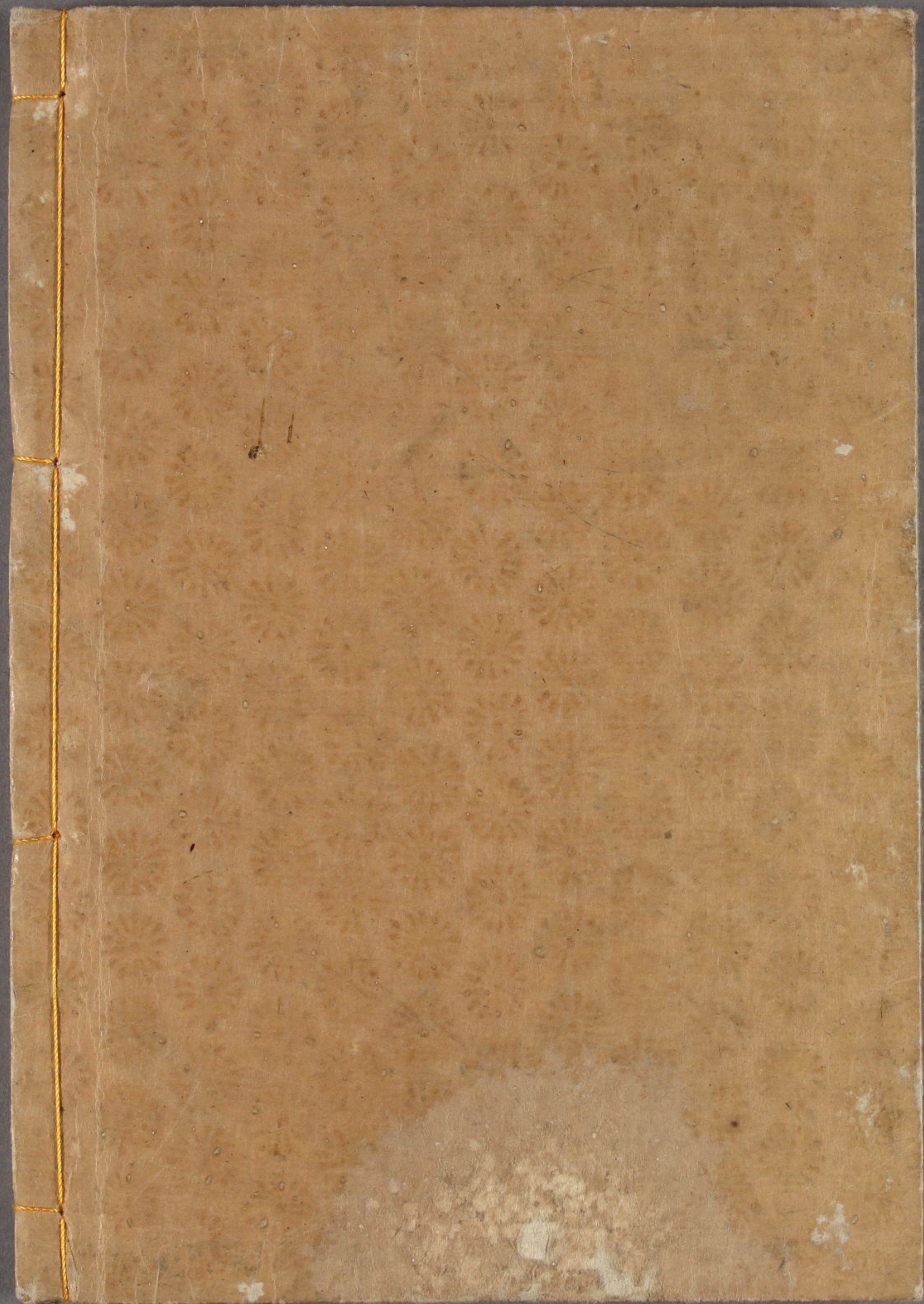
静化なき坊終始のゆるぎなく
 ばやしきうのすさるるに 畚
 かつらとり木のらつりきう
 毛もさてもうの人の扱
 百きよのそくせいの世に
 静の板にまき 師の春
 茶の縁す

了はすなむの秋
 三時をさ

三時雪
はな板溪西時
 三時雪
 三時雪
 三時雪



京東洞院佛光寺上元
 御指物所 菊屋平兵衛



Handwritten signature or name at the top of the page.

Handwritten text in cursive script, likely a letter or note.

Handwritten word or phrase, possibly a name.

Handwritten text in cursive script, continuing the letter or note.

Handwritten signature or name in the middle section.

Handwritten text in cursive script, possibly a list or detailed notes.

Large handwritten characters, possibly a title or name.

Rectangular stamp containing Chinese characters: 書狀, 京富小路錦上, 阿抄, 井筒左衛門兵衛.